福島県立医科大学学術成果リポジトリ
FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

現代社会と若者のこころ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2014-06-11 キーワード (Ja): 近代社会, ポストモダン, わが国での文化変動 キーワード (En): modern society, post-modern society, cultural changes in Japan 作成者: 志賀, 令明 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000553

福島県立医科大学看護学部紀要 第16号 1-6, 2014
Bulletin of Fukushima Medical University School of Nursing
■ 論 説 ■

現代社会と若者のこころ

Caring and the Society in Our Time

志賀　令明[1]
Noriaki SHIGA [1]

キーワード：近代社会，ポストモダン，わが国での文化変動
Key Words：modern society, post-modern society, cultural changes in Japan

Abstract

The difference between modern and post-modern society in Japan is said to arise from the loss of narrativity and the dissociation of surface and the depth.

The young people who intend to be nurses should study the changes in Japanese culture over the past 100 years or more and deepen their understanding of the changes in human relations affected by these cultural changes.

Especially, thinking about the historical changes in the formation of one's identity may be an essential key young people intending to enter the nursing profession.

要　　旨

ポストモダンと呼ばれる現代で生活する若者の心理は，それ以前の規律訓練型社会といわれた時代に成長した人とは異なってきているといわれる．

最も大きな違いは，わが国における物語性（深層構造）の喪失と，表層主体の現代社会で若者が生きていかざるを得ないというところにある．

ここではわが国の時代の変化に伴う文化の変容に焦点をあて考察し，これから看護を志す若い人たちの理解を促し，看護観の形成に寄与したいと考えている．

はじめに

10年一昔とは言うが，特に2000年以降での日本の変化，世界の変化には大きなものがある．ここでは，1990年代頃に既に進行していた社会の変化，心の変化，文化の変化などに焦点を当てて，現代の若者が「当たり前」のこととして既に自覚していない事を含めて明らかにしていきたい．視点を変えれば，1990年代頃に看護を志した人たちは，やはり「病むこと」「生きること」「老いること」「死ぬこと」などのいわゆる生老病死苦に興味や関心のある人たちだった．しかし，近年，長引く不況や格差社会の進行，非正規雇用者の増加，少子高齢化の進展あるいは看護系大学数の急増などが若者たちの価値観を変え，「資格としての看護」を前景に押し出して看護を目指す人が増えたような気がする．それはある意味職業としての看護が一般化したということであり，職業として自立しそのアイデンテイテイを確立した，といえる状態ではある．だからこそ，「看護」の道を志す若い人たちには，生きることとそれにまつわる喜びや悲しみを体験し，理解し，人生を自分のものにしていく心理的プロセスを経てもらいたいと思うのだ．ここでは主に1990年以降の日本人のこころの変化に光をあててみたい．

1．1990年代以降の世界と日本の変化

東[1)]によれば1991年を境に日本は大きく変わったという．この年に起こった印象的な出来事の一つはソヴィエト連邦の崩壊である．それまでの社会は，アメリカとNATO（北大西洋条約機構）という「西側世界」と，ソヴィエト連邦とワルシャワ条約機構という「東側世界」がせ

1　福島県立医科大学看護学部総合科学部門 Department of Integrated Arts and Sciences, Fukushima Medical University School of Nursing
受付日：2013年９月30日　受理日：2013年12月９日

めぎ合う関係を維持してきた．西側は資本主義，東側は共産主義である．中谷[2]によれば，資本主義は，企業と会社員（国民），国家が三位一体である関係を維持する道具として機能した物語であったという．経済が急速に発展した昭和50年代の日本に象徴されるように，企業が売り出したものが売れれば会社員の給料が上がった．そうすれば企業と社員の双方からの税収が国に入り，国はさまざまな事業展開ができる（大きな政府）というリンクが作られた．この時代の日本の特徴は，まだ終身雇用制度が残り，年功序列制も残っていたということだろう．つまり，一旦会社に勤めれば，簡単に解雇されることはなく，長く勤めれば給料は上がることが予想できた．したがって将来展望も持ちやすく，結婚・出産することにも大きな障壁はなかったといっていい時代である．しかし，このような大きな物語も東西冷戦の終結，アメリカ主導によるグロバライゼーションの進展によって変化を見せた．その結果の一つが，それまで競争の対象になっていなかった旧東側世界への西側企業の参入である．人件費が安い旧東側世界に西側の企業はどんどん資本を投下した．その結果，逆に西側先進国の賃金が低下し，雇用形態も不安定なものに変化した．日本でも雇用の非正規化が進行し，年収200万円未満のワーキングプアと呼ばれる貧困層が形成され，「格差社会」が作られた．1990年代の後半では，アメリカドルの信頼喪失による経済の衰退が始まった．情報・金融を中心とするグローバル資本が作り出した金融工学の一般化によって発生したアメリカのサブプライムローン問題の発生以降，世界は不景気に入り込んでいる．特に製造業の凋落は著しく，アメリカでの３大自動車会社の再編問題，日本での自動車産業の赤字化の問題などに代表されるように，2000年代に入ってから，世界は急速に希望を失い，活力を低下させているように見える．

２．1970～80年代の日本と近代社会的心性

現在60歳前後になっている人たちが青年期を過ごした1970年代（昭和40年代後半～50年代前半）の社会は,「規律訓練型社会」[1]と呼ばれる．上述したように，経済発展が促進された時代ではあるが，現在のようなOA化（コンピューター化）はまだ十分ではなく，大半の企業では，先輩が後輩に仕事を教えるという人事教育システムを採用していた．新しく仕事を覚えることは当然対人葛藤や能力に関する葛藤をも生み出し，特に若者層は，その葛藤に耐えながら企業の社員の一人として成長していくことが求められていた．いわばエリクソンの言う「職業的アイデンテイテイ」の形成が発達課題であった時代であり，若者には社会の規律に自らを適応させる柔軟性と持続性を持つことが要求されていた．併行してこの時代では「合理的な自我（欧米的な自我）」を形作ることが課題とされ，それ故，70年代は日本における近代社会の結実期であると捉えられる．家族形態では核家族や単身世帯が増加し，特に70年代は，結婚後の女性が専業主婦になる割合が最も高い時代であった．

このような合理的な自我の追求は，いくつかの問題を引き起こした．一つは若い女性を中心とする摂食障害の増加であり，もう一つは人格障害，特に80年代頃からの境界型人格障害の増加である．そのなかでも70～80年代に多かったのは神経性無食欲症（anorexia nervosa）であり，その出現要因としては，ａ）たとえ高学歴であっても専業主婦になってしまう母親に代表される女性性の否定，ｂ）相変わらず続く男性社会に対する女性であることの異議申し立てとしての女性性の否定，ｃ）（女性としての）成熟拒否，d）合理的な自我を持てない事に対する代償としての強迫的食事制限，ｅ）癒着的母子関係への異議申し立て，など様々な議論がなされた．他方，特に80年代では神経性大食症（bulimia nervosa）がやや高い年齢層（青年期～成人期）の主に女子で出現した．過食嘔吐を頻回に繰り返し，抑うつを伴うものである．この神経性大食症は上記の境界型人格障害と深いかかわりがあった．

鈴木[3]は特にこの境界型人格障害を，近代社会における合理的な自我を形作ろうとして果たせなかった一群の人たちとして捉えている．問題に適切に対処して，合理的に課題を解決できる成熟した自我が求められていたのが1970～1980年代の日本であった．それに対して,「自分がそのような合理性や論理的な問題解決能力を持っていない」と強く感じたまま青年期に至れば，自己肯定感は低下し，自分の存在に対して疑問を持つに至るかもしれない．そのような空虚感や自己否定感を代償的に満たすのが,「食べ吐き」であったとも考えられよう．

そのような意味で，摂食障害は極めて「近代の病」であり，併行して，古典的な「境界型人格障害」も同様に「近代的自我」を持ち損ねた人たちが示す病的な状態であったと考えられる．

３．1990年代以降の日本とポスト・モダン的心性

1991年のソヴィエト連邦の崩壊を境にして広まったアメリカの一極主義（グローバライゼーション）はまたたく間にコンピュータネットワークを全世界的に普及させ,90年代の後半の日本では携帯電話が一気に普及した．ちなみに電話機の普及の歴史を眺めると，最初の電話機はおおむね玄関先に置かれていた．ちょうど少しの間の訪問であれば玄関先で済ませたように，外界（ソト）と家族（ウチ）の境界である玄関先に電話機は置かれたのである．その後，徐々に電話機は居間に置かれるように

なり，プッシュホンが主流になった1980年代には子機が子ども部屋にも置かれ，子どもたちの長電話が社会問題にもなった．90年代になり携帯電話が普及し始め，2000年代になるとほぼ全ての高校生がケータイを持つに至り，個々人は「家族（ウチ）」という障壁なしに直接「外界（ソト）」と向かい合うようになった．

併行して，バブルがはじけた90年代以降，不景気だと言われつつも社会の消費者化は伸展した．諏訪[4]によると「子ども」が消費者として行動するに至ったのもこの時期前後からだという．個人経営の商店が主体であった1960年代くらいまでは子どもはお金を持つことも使うこともできない存在だった．たとえお金を持った子どもが店に行ったとしても客としては見てもらえなかったのである．子どもだけではなく60年代は青年期もまた消費者としては機能し得なかった．なぜなら彼らは規律訓練型社会における被訓練者であり，いわゆる正規のモラトリアム構造の中にいる間は，社会的に責任を負う必要は少なかったが代わりに労働収入も少なかったから消費者としては機能しにくかったのである．

ところで「消費者」として機能することを覚えることは，自分の支払った分のお金や労力と同程度かそれ以上の対価を求めることであり，併行して，耐久消費財とは限らないものを手に入れることでもある．まず，対価に関してだが，諏訪[4]によれば，子どもたちは「学校」という束縛された環境で自分の時間や自由を差し出す対価として，それと同程度に自分を満足させてくれたり快感を与えてくれる環境を求めたという．現実の学校は，テレビとは違って次々に面白いものを与えてくれるわけではない．したがって自分の支払った労力（我慢して授業を受ける）を超えて続けられる授業は「消費対象とは見なされなく」なり，そこで私語や徘徊などの学級崩壊現象が出現したという．

他方，耐久消費財ではないものを求める場合には，その場限りの購買欲を喚起するものを購入する心性が働くと言って良い．たとえば地方都市の郊外に急速に出店したユニクロやシマムラなどの量販店で超高級なブランドを求めようとすること自体あり得ないことである．ブランドは歴史であり，その商品やメーカーが持つ物語である．大量に生産される低価格の商品を購入することを覚えたことは，表層の差異にのみ着目して，その商品が持っているかもしれない歴史性や物語を切り離しての消費がこの時代に始まったことを意味する．

東[1]はわれわれが深層に着目せず，表層の差異のみに着目した行動を行うようになったこと自体が90年以降のポストモダン（近代以降）の心性であるという．つまり，それ以前の近代社会で求められていたアイデンテイテイはある意味では「私」という歴史であり，物語である．そのような歴史性や物語性が生活から排除されるのが当たり前になった現代では，「私」という物語は不要になり，その場をいかにやり過ごすことができるか否かが生活の課題になったとも言える．そのような意味で，ポストモダン以降に形成された自我は，近代社会が求めた「私」という物語を作り上げる葛藤を体験していないだけ未熟で自己中心的でありうる．安永[5]はこれを中心気質と名付け，天真爛漫ではあるが葛藤に弱い特性を持つと考えた．

たとえば1980～90年代の社会現象にまでなったものに前述した境界型人格障害（BPD）がある．特にアメリカでは幼少時期の心的外傷体験に着目が及び，BPDの多くが性的な虐待を含む外傷体験を自ら言及するに至った．日本でも同様の傾向は見られた．いわば「かわいそうな私の物語」が彼女らの口から積極的に語られたのがこの時代であった．

しかし，鈴木[3]によればポストモダンの現代ではBPDを含む人格障害自体が軽症化しているという．鈴木[3]は東[1]にならって，その理由を表層と，（物語という）深層の解離に求めている．

４．現代における「解離」

特に90年代後半以降，我が国では携帯電話の利用者が圧倒的に増えた．それも主に高校生を中心にする若者がその利用者となった．「ウザイ」ということばが頻繁に使われるようになったのもその頃からである．「ウザイ」ということばは相手の存在を重荷に感じ，状況そのものを否定することばであるかのように使われている．しかし，その状況を否定したがっているのは「ウザイ」ということばを発している本人その人であり，状況が否定に値するか否かの客観的な指標は誰も持っていない．つまり，「ウザイ」というのは極めて主観的なことばであり，その状況の中に「自分」がいたくない（いれば自分が傷つく）主体によって発せられることばである．携帯電話の普及と「ウザイ」の一般化は，携帯電話がわれわれ一人一人に与える全能感（自分の欲望は限りなく満たされると素直に信じている幼い状態）がいかに大きいかを示しているのかもしれない．つまり，携帯電話はわれわれに「自分の好きな時に・自分の好きな相手にのみ・誰にも邪魔されることなく」コミュニケートできる，という幻想を与えた．携帯電話のつながる範囲はリビドー（対象希求性）の延長となり，われわれの全能感を高めたと解釈できる．

他方，携帯電話，特にメールの普及は，文字情報主体のやりとりを普及させた．メール文字は「ことば」ではあるが，対面したもの同士が共通に理解し合える体験に基づいたことばとは違い，書き手や読み手の思い込みが

強く反映される特徴を持つ．あるメールが相手にウザイと判断された場合にはそのメールに対する返信は行われない．そして返事がもらえない発信者は，自分がそのメールにこめた思いが激しければ激しいほど，その思いを受け取ってもらえない（ないしは相手にとってウザクなってしまった）という孤独感や見捨てられ感・自責感を強めることになる．傷つくのだ．

つまり，一見全能であるはずのわれわれは，相手にとって不都合な思いを発信した途端に「排除」の対象となり，見えないつながりから一瞬にして切り離される存在に転落する危険性を秘めているのが現代社会であるといって良い．常に自己愛損傷の危険性と隣り合わせで生きているのが現代である．

このような自己愛損傷は，安永[5]によって「中心気質」と名付けられた若者には直接向かい合うにはつらすぎる体験かもしれない．そこで採用される防衛機制が，①自己愛損傷を前もって避けるために自分の秩序世界の維持にしがみつく「強迫」（たとえば，マニュアルに定められた言動にしがみつき，そこからの逸脱を極端に好まないなど）であり，②自己愛損傷が予測される場面を巧みに避けて通る「回避」（たとえば，相手の言うままになることで，それに逆らうことで起こりうる葛藤を避けるなど）であり，③自己愛を満たすために常に自分が注目の的になっていないといられない「演技」（たとえば，他人の目のあるところで挑発的な言動を行い，自分への注目を集めようとするなど）などであるとされる．

しかしこれらの防衛をもってしても自己愛損傷に直面せざるを得なかった場合，われわれはそのような（自己愛損傷）状況が「なかった」かのように振る舞うかもしれない．それが「解離」である．そのような意味では「解離」はもともと自己愛が強い人が，たとえば携帯メールなどで「ウザイ」と判断され排除の対象になった時に，自分の幼少期を含む歴史の中にある「自己愛が傷つき，だからこそその自己愛を回復するために行った様々な（結果的にウザイと判断されてしまった）出来事」という物語性を伴ったイベントを記憶から消し去ることを可能にし，自己愛損傷に直面しないで済む極めて便利な方法ではある．

つまりこの瞬間，われわれの個々の歴史性という「物語」は一旦姿を失い，一見平然とした「表層」のみが出現することになる．われわれは破綻のない表層のみを演じ，自己愛損傷がもたらしうる様々なこころの揺らぎから距離を取りうる．鈴木[3]によれば，この全ての心的な防衛を打ち破って体験されるこころの揺らぎは，現代社会での「境界例」の原因であるという．かつて「かわいそうな私」の物語を切々と語り，過食・嘔吐をし，リストカットをくり返した境界例達は，その物語性の過剰から現代社会ではウザイ存在として聞き手を失い結果的に対人場面から撤退（軽症化）せざるを得なかったが，解離を含む全ての自我防衛の破綻が引き金になって顕在化しうる余地は残っている．そのような意味で，現代の境界例は80～90年代と同じような「物語」のとりこにはなっているが，彼らが「語り手」として機能することに対する許容度が狭まってしまったのが現代社会であるともいえよう．

５．現代社会と「承認志向」

先に深層構造の喪失と平然とした表層の維持が現代の若者の特徴だとしたが，見方を変えれば上記の特徴は，なりふり構わぬ蓄財と消費によるステータスの追求（団塊の世代に見られた上昇志向）から，他者のまなざしに敏感であり，他者と同調しながらわずかな差異の実現によって自己を確認しようとする相対的な自己像の形成（下流志向[6]）にシフトしたものであるともいえよう．

この相対的な自己を確認するという視座を提供した代表的な議論に，土井隆義[7)8]がある．

土井[7)8]は，現代の子供たちの生活する教室は島宇宙化しており，そこでは数名程度のグループが互いを仲間として認識し，他の集団とはほとんど没交渉であるという．しかし，その仲間集団も決して安定できる関係とは限らず，互いにそのキャラがかぶらないように，空気を読みながら生活しているという．たまたまその集団からなにかをきっかけにして外れてしまった場合，その子供は帰属先を失い，学校という状況で浮いてしまい，居場所をなくすことになる．

それゆえ子供たちは，自分が属している集団から外されないように，常に承認を求めるような行動パターンを身につけなければならない．

このパターンは大学生レベルになっても持ち越されるだけでなく，就職活動をする際にも強く求められる．いわゆるコミュニケーション能力を重視し，ストレスマネッジメントや自発性を含む全人的な能力が「雇用される能力」として社会から求められていることを指摘したのは本田由紀[9]である．

つまり，現代社会では何かを学んで高学歴化し，高学歴を土台に「良い会社･高い給料」を求めるよりは，（高学歴化が普遍化し，高学歴＝競争率の高い大学に進学できるほど，学習に努力したという勤勉さ＝が自分を支えるバックボーンとなりえないがゆえに）どのような場面でも機敏に立ち回れる対処能力が高い人材が求められており，その幼若型が「空気が読めて，場の雰囲気を盛り上げることができるキャラ」として周囲から「承認される」ことを強く求める子供たちの現在として表現されているのかもしれない．

そのような意味で，たとえば幼少期や児童・思春期に心的な外傷体験を持ったものに取って現代は住みにくい社会かもしれない．外傷体験をせつせつと語ろうとしても聞いてくれる人がいないだけではなく，重い・ウザイ人物として排除の対象になれば自己効力感はさらに低下し，承認されることを諦め引きこもるか，あるいは承認されるためのキャラを無理やり作り出し明るい自分を演じなければならなくなる．

いわば，伝統的な「勤勉に自己を育て上げる」という文化が，「他者から承認され，高いコミュニケーション能力を持つこと」という理想形からのみ語られるものに変容しつつある現代では，より幅広い視点で，自己に向き合う作業が必要とされている気がする．

6．現代社会と看護の役割

格差社会が進展し，年収200万円未満の若者たちの数が増えて，子育てはおろか結婚すらままならない時代が現代である[10]．しかし彼らは少なくとも昭和40年代の若者たちのように社会に対する異議申し立てをしないまま，ひたすらコンビニで弁当を買い，カップ麺を食べながら生活している．生まれた時から，コンビニ弁当やカップ麺があり，それを食べ，携帯でメールをし，ネットでブログを書くことが当たり前である世代では，（われわれの世代が白いご飯さえあればなんとか生きていけると思うように）それさえできれば世界はそれなりに不都合ではないものなのかもしれない．まさに表層を流されるのが現代の若者流なのかもしれない．深層の物語に触れることなく，あるいはあえて物語を排除し，互いに傷つけあうことなく暮らすことはたしかに白物家電に囲まれた生活のようなそこそこの安定感を与えてくれるかもしれない．しかもたとえばこれまで世界をリードしてきたアメリカは，その繁栄の基盤としてきた自動車産業での衰退やサブプライムローン問題，株価の低落に代表されるように力をなくしつつあり，社会全体がこれまでの歴史を支えてきた伝統産業（物語）を失おうとしているのも事実である．

そのような表層と深層との解離が当たり前になった社会の流れの中で急速に注目される仕事の一つが看護職なのだ．

言うまでもなく看護は表層だけのきれいな職業ではない．単にわれわれが自ずと目を背けている老いや傷や死や排泄物という出来事に直面するだけではなく，患者やその家族が有しているはずの歴史や様々な葛藤や喪失を含めた物語全体に対する感受性と内的な葛藤を処理する力をもって接するのでなければその人をケアすることにはならない．基礎看護技術などの実習を含め，たしかに看護を学ぶことは技術を学ぶことではある．しかし技術自体，その技術を持った人からの対面的な伝授を通してしか習得できないから，そのような意味で看護を学ぶということは，ポストモダンの現代に生きながら，90年代以前の規律訓練型社会（近代社会）に学ぶという二重の世界に生きなければならないことを意味する．その二重性は，より単純化された表層を中心にする生き方がある意味では処世術になっている現代の若者にとっては「重くて」「ダサイ」ことのように感じられるかもしれない．あるいは逆に「技術」を武器に見知らぬ看護の世界に入っていこうと考える人もいるかもしれない．

しかし，その技術を教えてくれる先輩は，その技術を獲得するまでに多くの葛藤を含む経験を積んでいるはずである．それがその人の歴史であり物語なのだ．同じように，その技術で看護される人にも歴史と物語がある．特に現在80歳を超えた人たちには，太平洋戦争とその前後の貧しい日本での生活体験がある．生き延びるということは，単に長い人生を過ごしてきたということではない．本人は自覚しないままにせよ，自分の置かれた状況を受け入れ，適応するために内的な葛藤や悲しみなどを乗り越えてきた生きる力を持って現在に至っているということである．そのような力（歴史性・物語性）を持った高齢者を老人・障害者と一面的にみなして看護するとしたら，それは表層的な看護をしているのに他ならない．

この文章を読んで分かってほしいことは，人には歴史と物語があるということなのだ．若い人たちは自分たちには語るべき歴史すらないと思うかもしれないが，現代社会は自分の歴史や物語に気づかせないように解離を起こさせやすい文化の中にある．しかし現実には解離とは無関係にひたすら生きてきた人たちが多いのである．とすれば，看護を志す若い人たちは，表層で人を判断するのではなく，その人が生きてきたことを聞かせてもらうことから看護の基礎を始める必要があるだろう．看護で心理学を学ぶ意味はそこにあるのだ．自らの語りを聞いてくれる相手を見いだした時に，人は「わたし」に出会う，といわれる．看護者として患者の歴史や物語に触れることができれば，そこには単に「看護者」としての自分がいるのではなく，人と人のあいだに生きる存在としての「わたし」もまた同時に生まれてくるはずなのだ．

引　用　文　献

1）東　浩紀：動物化するポストモダン，講談社，2001.

2）中谷　巌：資本主義はなぜ自壊したのか，集英社，2008.

3）鈴木　茂：境界性人格障害などの人格障害，精神医学，47（2），157-164，2005.

4）諏訪哲二：オレ様化するこどもたち，中公新書，2005.

5）安永　浩：境界例と社会病理，岩井寛（編）現代臨床社会

病理学，岩崎学術出版，1980.
6）内田　樹：下流志向，講談社，2007.
7）土井隆義：友だち地獄，ちくま書房，2008.
8）土井隆義：キャラ化される子どもたち，岩波ブックレット，2009.
9）本田由紀：多元化する「能力」と日本社会，NTT 出版，2008.
10）三浦　展：下流社会，光文社，2005.